連続講座「国民国家と多文化社会」第12シリーズ

＜帝国＞と国民国家

グローバリゼーションの版図

第１回／５月24日（金）

＜帝国＞とは何か

報　　告：崎山　政毅（立命館大学文学部）

ｺﾒﾝﾃｰﾀｰ：酒井　隆史（大阪女子大学人文社会学部）

第２回／５月31日（金）

＜帝国＞とジェンダー

報　　告：土佐　弘之（東北大学法学部）

ｺﾒﾝﾃｰﾀｰ：岡野　八代（立命館大学法学部）

第３回／６月７日（金）

＜帝国＞とインターナショナリズム／全体主義

報　　告：植村　邦彦（関西大学経済学部）

ｺﾒﾝﾃｰﾀｰ：細見　和之（大阪府立大学総合科学部）

第４回／６月21日（金）

＜帝国＞と文学―グローバリゼーションの中の言語文化―

報　　告：鈴木　貞美（国際日本文化研究センター）

ｺﾒﾝﾃｰﾀｰ：田口　律男（龍谷大学経済学部）

場所：立命館大学創思館カンファレンスルーム

時間：16：30～19：00

＜帝国＞と国民国家

グローバリゼーションの版図

アントニオ・ネグリ＝マイケル・ハートによって2000年に発表された『帝国』(Empire，ハーバード大学出版，2000年）は，現在進行する政治的・経済的・文化的グローバリゼーションが地球大規模に統合された管理社会の実現であると見做し，そこからの脱出を模索する刺激的な提言として論議を生んだ。しかし，国民国家の欲望の所産としての帝国主義からこの〈帝国〉への転換が，国民国家の質的変換を果たすためのものとして機能するのか，ネグリ＝ハートが言及する群集―多数性（ムルティチュード）がグローバリゼーションの質的転換を果たす主体となりうるのかなど，グローバリゼーションと国民国家の相関については多くの考えるべき問題が残されている。

今回の第12シリーズではネグリ＝ハートの『帝国』を出発点に，現在進行するグローバリゼーションの実体を確かめながら，国民国家がどこに向かおうとしているのかについて思想・歴史・社会・文化などの多方面から考えたい。そのために先ず第１回では『帝国』が提示したことの意味について概観し，以後ジェンダー，全体主義／インターナショナリズム，文学というポイントで，現在私たちが立つ場所を検証し，進行する世界の矛盾を思考するための力を得たいと思っている。

なお，今シリーズは国際言語文化研究所の国際シンポジウムとして予定している「エンパシー」シンポジウム（６月28日）とも相互に連携して構成されているので，併せて多くの参加を期待したい。